

つな
が
り
ま
ち
と

Season¹⁵

茨城県
東茨城郡
茨城町

Autumn / Winter 2022





撮影場所:大戸地区

そらいわし
 空翳 地に恵みを降らせ 壁葉を紅に染める
 師走 足音を鳴らし は季 巡り変わる
 人の暮 歩む様 かた模とし
よみゆり
 文織 編まれ 地の彩りとなる
 Sunは 茨城町と ゆるやかにつながる いくつもの縁を
 人々の暮らし 情景と共に 綴り伝えていきます

Contents 目次

- 03 特集一文を編む
- 07 『場』が持つちから
新しい文化的施設について
- 09 つむぐ、めぶく
地域文化のこれから
- 11 まちで暮らす人
まちを想う人
- 17 連載 マチのケシキ
- 18 編集室から

茨城県
 東茨城郡
 茨城町
*Sun*¹⁵
 Autumn / Winter 2022



Cover
 “編む 彩る”
 取材先で偶然目にした生け花。
 草花の凛とした佇まいが呼応し
 場に彩りを添える。
 人の手に編まれることで
 各々が作用し、個性がより引き立つ。
 まちという集まりも
 そんなものであると良いな、と思います。

※取材に際し、一部マスクを外しての
 撮影をお願いしておりますが
 新型コロナウイルス対策を十分に講じたうえで、
 取材に臨んでおります

大ホールで開かれた第48回町民祭。
子どもたちの絵画やオブジェ、書道、
大人の手芸や油絵作品が一同に並び



特集

文を編む

秋の一日。町の文化祭である「町民祭」へ足を運びました。
会場の中央公民館大ホールは来年取り壊され
新しい施設が建てられます。
かつて隣接した中央公民館と並び
まちの文化の中心であったこの場所のあゆみを追い
地域文化のこれからを考えます。

構成 | 石川聖太 文 | 二川ナオミ 写真 | アラタケンジ

文化遺産を愛護し
先人の努力に感謝できる
町をつくりましょう

— 昭和五九年制定 茨城町民憲章

中学2年生

中学2年生

中学3年生

小学4年生



1階のロビーの様子。ラウンジチェアが置かれ人々が談笑する場となっている

つどいの場として 大いにご利用 ください

— 広報いばらき 昭和五〇年三月号



写真上から：ロビーに置かれたミロのビーナス／簡易結婚式場。普段は学習室として利用されていた



写真上から：NHKのど自慢大会。TV中継された／雪の降る中、入場を待つ約200人の行列



写真上から：平成16年フレンドほっとフェアの様子。太鼓のお囃子や踊りなどのクラブ発表が行われた／平成17年のちびっこ相撲大会。大相撲の中村部屋を招き、町内の小学生が参加した

中央公民館のなりたち

茨城町の中央公民館は、これまでに二回建設されています。日本の戦後復興の流れの中、「地域にも文化芸術に触れる機会を増やして欲しい」との声が全国的に高まり、昭和三三年に初代中央公民館が建てられました。

地域の芸術家や芸能団体、住民たちの文化芸術活動への幅広い利用を見据えた木造平屋建て。講演会や映画会、柔道、剣道、卓球競技などにも活用できるように設計されました。また、約七〇〇人を収容できる大集会所を備え、講堂や会議室、図書室、調理室などの他、簡易結婚式場も設けられたりと、当時の世相に即した大規模な施設だったそうです。公民館はたくさんの人でにぎわい、昭和三五年には「運営の優れている公民館」として文部大臣賞を受賞しました。

昭和三十六年十一月に中央公民館にて第四回文化博覧会が開催され、まちの子どもたちが描いた絵や町民の美術作品が展示されました。文化博覧会はその後、町民祭と名前を変え、書道や絵画を展示する文化展、伝統芸能の発表・地域と行政の意見交換会、農産物や花木の販売が行われ、現在まで続く地域文化の礎となりました。

つどいが生まれる場

その後、茨城町制二〇周年にあたる昭和五〇年二月十一日に、鉄筋コンクリート三階建ての新たな中央公民館が完成しました。和室、学習室、視聴覚室や三〇〇人が収容できる小ホールなどが設けられました。また、地域の人々がふれあう場として設計された二階のロビーには、上石崎出身の彫刻家助川武史さんが彫ったミロのビーナス像が置かれました。各階に動物の剥製や町の重要文化財が展示されるとともに、まちの知の拠点となる図書室の蔵書も増えました。

また、中央公民館に併設される形で、およそ千人が収容できる大ホールも建てられました。これまでより大規模な施設となり、学校行事や柔剣道大会、オリンピック選手の講演会や成人式など、さまざまなイベントが行われました。町の広報紙「広報いばらき」昭和五二年二月号には「公民館でNHKのど自慢 熱演賞はひめま盆踊り」とあり、「前日の予選には五三〇人が参加。当日はあいにく雪が降る日だったが、夜中の一時には入場を待つ女学生の姿も見え、朝の八時には約二〇〇人が列をつくった」との一文がありました。

公民館のこれから

その後も、町のお祭りや映画鑑賞会、町内の各学校から選ばれた絵画作品の展示、現在も続く町の文化祭「フレンドほっとフェア」など、さまざまなイベントを開催する場として機能してきましたが、平成三年の東日本大震災で建物被災、使用が不可能となり、翌年に中央公民館は解体されました。

日々の生活に楽しみを創るため、さまざまな活動や趣味を通じたつながりが生まれ、地域社会と直接ふれあう場として中央公民館は機能してきました。しかし、社会状況の変化や価値観の多様化により、公民館のような施設が持つ意味は刻々と変わってきています。

地域の文化施設の価値を私たちが考え、より深く理解し、これまでと違う新しい形にしていこうと求められているのかもしれない。



昭和51年完成後すぐの中央公民館(右)と大ホール(左)



敷地内で記念撮影をする若者たち。成人式の記念だろうか



昭和62年町少年剣道大会。町内に強豪の道場が複数あり、定期的に大会が行われた

可能性を形にできる施設に

株式会社岡田新一設計事務所
代表取締役社長 柳瀬寛夫



左から：設計部長の小林信策さん、柳瀬寛夫さん、井津利貴さん。
地輪の窯跡など、地域の個性を踏まえつつ、なじみやすい施設を目指します sites.os-a-a.co.jp

弊社は、これまで最高裁判所庁舎や東京藝術大学奏楽堂(音楽ホール)、宮崎県美術館などの公共施設を手がけてきました。今回、茨城町の新しい施設の設計に取り組みさせていただいております。私が町を訪れた際、穏やかな大地に木立や田畑、住宅や工場といったさまざまな生活領域がオープンにつながる地域という印象を受けました。それをヒントに、新しい施設には隣接する町役場やゆうゆう館といった既存の公共施設との空間的なつながりを持たせるオープンな設計にしています。また、施設内部の個々の空間にも連続性を持たせ、工夫次第でさまざまな使い方ができる仕掛けを散りばめています。例えば、町民のみならず日頃の成果を発表するホールは、舞台を広くしたり客席を増やしたり、どちらも収納して平土間にすることもできる可変式ものを提案しています。従来型のホールは重厚で特別なハレの日のための空間でしたが、茨城町の新しい施設は日常にも使用でき、さまざまな可能性を秘めた建物になると思います。

これまで手がけてきた施設の中にも、近いコンセプトの建物があったのですが、使用する段階になって自由に使いこなせることが浸透せず、せっかくの設備がうまく活かされていないものも見てきました。実際に建物が完成した際には、私たちがイベントをやってみることで設備の活かし方を示できればと考えています。令和四年十一月現在、建物の基本設計が完成したので、これからより詳細な内容を詰めていく時期になります。それと並行して、実際に施設を運営していくためのワークショップも始まっており、みなさんからいただいた多くのアイデアを、可能な範囲で設計に入れ込みたいと考えています。新しい施設と一緒に創り上げていきましょう。



地域にはキーパーソンと呼べる人たちが必要。
「地元を面白くしたい!」と思う気持ちに火をつけるんです、と代表の伊東さんは語ります theatre-workshop.co.jp

シアターワークショップは劇場を持つ文化的施設を専門に基礎調査や基本構想、設計と管理運営のコンサルティング、そして施設運営や事業の企画などを行っています。茨城町の新しい施設については、皆さんと一緒に考えるワークショップを通して、施設計画や完成後の管理・運営計画に携わっています。

全国の地方自治体にホールが作られるようになったのは一九七〇年代半ばから。初期の頃は設備的に十分ではなくても多用途に対応できるホール、その後国立劇場や彩の国さいたま芸術劇場のように、目的に特化した設備を有する本格的なホール、近年は一つの施設に用途別に機能を持たせた複数のホールというように、ホールの考え方は時代によって変化してきました。しかし、いつの時代も良質な劇場空間を作り上げるのはステージに立つ人と、それを観にくるお客様なのです。芸術作品に興味関心のあるお客様が集まらなければホールの意味がありません。

私に通っていた小学校では三年生になると劇や舞踊の授業があり、発表の場がありました。それが原体験となって今の私につながっています。ステージに立ち、仲間と一つの舞台を作り上げることで得られるさまざまな経験は、将来のお客様を育てることなのだと思っています。

ただ建物を作るだけでなく、お客様もつくること。集客ではなく、創客がこれからの公共ホールが持つ大きな使命になってくることでしょうか。例えば、VR(仮想現実)やAR(拡張現実)などの発達とともに、芸術のあり方も常に変化しています。地域のホールも、子どもの柔軟な発想のように既存のあり方にとられないアイデアを、いかに企画や運営に反映できるかが鍵になってくると思います。

これまでのホール、これからのホール

株式会社シアターワークショップ
代表取締役 伊東正示

『場』が持つちから

これからの場所の意味って？
まちの新しい施設の設計をする人、運営を考える人に
施設と人のありかたを聞いてみました

定期的開催するワークショップのニュースレター。参加者たちの熱のある声が集まっています



「新たな文化的施設(仮称)」の完成イメージ。人々のつどう場としての運営が期待されている





集まってくれたのはダンスサークルをはじめ、卓球や絵画クラブの方々。新しいホールが完成するのを心待ちにしているそです

つもぐぐめぐぐ

地域文化のこれから

令和七年度に完成する新たな文化的施設（仮称）の建築予定地となるため、取り壊される中央公民館大ホール。ここで日々クラブ活動をしていたみなさんに集まっていただきました。町には現在五〇を超えるクラブがあり、その多くが中央公民館と大ホールで活動をしていました。この場所でダンスサークルの活動をする方々は、「毎週みんなが集まって踊っていたので、なくなるのは少し寂しいです。新しくできる場所で踊ることができる日を楽しみにしています」と話されていました。

現在開催されている、新しい文化的施設に関するワークショップの中でも、参加した方たちから施設の使いやすさや運営の方法に加え、「そもそもここで何ができるのか？それに私たちはどう関わるのか？」という声が上がリ、各々が積極的に発言する様子が見られました。

地域の在り方の変化

以前は、地域単位でクラブ活動の発表会や競技会などの機会も多く、それに向け活動をするなど、目標や楽しみがあったと思います。しかし、地域の人が減り、社会の変化を経て、その規模は縮小が続いています。個々の多様化した価値観が重要視され、興味や嗜好の合う人たちが地域や場所を問わずつながることが主流となり、地域という括りも希薄に感じられることもあります。

そもそも地域の魅力とは？という考え方にすら、疑問を抱くことも少なくありません。

日々のくらしも、特別な日も

競技会や大会、展覧会などで発表をする「バレの場」と、日常生活に彩りを添える「ゲの場」。この二つがつながり、時に芸術に触れ、時に人々が自然と集まる場所として、使い方を広げていくことがこれからの文化施設に求められることなのだと感じます。

例えば、日頃の成果を見せる場所。演奏会を鑑賞する場所。学校帰りに立ち寄れる場所。親子で過ごし、その子どもが親になり再び訪れたくなる場所。ただ、なんとなく過ごせる場所。そして、どの時間に行っても、適度に人の目がある場所。

人と人がふれあうことで、人が育ち、また人を支える。そんな場所があるまちで暮らしながら、日々の生活に楽しみを作ることが大切だと思います。規模が小さくてもいい、それを続けることが、文化を編むということであり、いつの時代になっても忘れてはいけないものなのです。これからの文化施設は、それを形にできる場であることを望みます。

まちで暮らす人 まちを想う人

— Feeling × Thinking

私にとっての音楽

まちを想う人

メソフプラン 鈴木望

写真＝アラタケンジ 文＝川ナオミ

鈴木さんは茨城町出身。国立音楽大学大学院修士オペラ科修了。平成二七年より二年間びわ湖ホール専属歌手を務め、小澤征爾氏はじめ多くの世界的巨匠と共演し、平成三〇年度文化庁在外研修員として二年間派遣。オペラの出演をはじめ精力的に活動されています。

ふわつと始まった音楽への道

小学生までは町内で過ごしましたが、兄弟が私立に進学していたこともあり、中学校は私立に進みました。私が進学したのは県南にある中学校の音楽科でした。音楽を勉強しようと思ったきっかけは、強いて言えば小さい頃からピアノを習っていたこと。楽しそうだしやつてみようかなという割と軽い志望動機だったと思います(笑)。入学時はピアノ科を選んだのですが、二年生に上がる際に転科試験を受け、声楽科に編入しました。音楽に特化したカリキュラムが特色の学校で、真剣に音楽を学ぶには恵まれた環境だったと思いますが、当時の私は普通科と比べて将来の選択肢が狭くなることへ不安を感じていました。なので、高校では普通科の勉強をしよう、と考え公立高校に進学しました。

音楽とは関係のない高校生活を送ろう、と思っていたのですが、結局一年生の半ばから音楽のレッスンを再開することになります。入学早々、中学時代の経験を知った音楽の先生は「それはもったいない」と、声楽の先生を紹介してくださいました。しかし、一大決心をして音楽から離れた私は返事をできずにいました。高校での音楽授業の内容は普通だったと思います。しかし、音楽ってこんなものだった？という違和感がありました。それは、同級生と私では音楽と向き合う熱量に差があるからなのだと気づき、それでようやく音楽を続けてみようかな、という気持ちになっていきました。それから月に数回、声楽のレッスンを受けに都内の先生のもとへ通いました。その後進路を選ぶ時期になり、この先も音楽を続けるかどうか中途半端な気持ちでいたところ、今度は地元先生の紹介され、その方に背中を押されるようにして、音大への進学を目指すことを決めました。

芸術と向き合う日々

音大に入学し二年生までは幅広くいろいろな授業を取り、自分がどんな切り口で音楽を学んでいくか決めきれずにいました。三年生になると声楽科の中でも優秀な生徒が選ばれて入るクラスがあるのですが、それに入れず焦りを覚えたことがきっかけで、自分の軸を真剣に考えるようになりました。もともと美術が好きだったことや世紀末の音楽を専門に研究している先生が身近にいたこともあって、その時代を入り口に音楽に向き合うようになりました。一九世紀はサロン文化(*)が流行し、文化人たちの交流が活発化したことで、芸術や思想の新しい潮流が生まれた時代。現代に生きる私たちとクラシック音楽を結びつけるのは譜面しかありません。そこに書かれている音をより深く表現するために、曲が書かれた時代背景や当時の作曲家たちが影響を受けたものを知ることが手がかかりとなります。史実を丁寧に読み解くことで、譜面の解釈に深みが出せるようになることをその時初めて意識するようになりました。以降、もっと深く学びたいと思うようになり、卒業後、大学院のオペラ科に進学しました。院では同期が七人に絞られます。二年生の秋にある公演に向けて一本のオペラを仕上げるのがオペラ科の特色です。もちろん七人だけでオペラは完成しないので、科を修了された現役第線まで活躍されている先輩方にも授業にご協力いただき、オーケストラの生演奏と合わせ、衣装やメイクなど、プロの方たちが関わり一本の舞台を作り上げていく経験をしました。



*: 貴族や上流夫人が客間で催した社交的集会。文学・芸術・学問その他の文化全般について、同好の人々と自由に談話を楽しんだ

想像を超えた世界へ

大学院修了を間近に控えた二〇二年三月十一日、東日本大震災が起きました。メディアでは荒削りの情報が流れ、秋の公演でお世話になった先輩方の仕事がどんどんキャンセルされていきました。有事の際、音楽にできることは被災した人々の心を癒すことなのかもしれないませんが、震災直後はとてもそのように考えることはできませんでした。海外アーティストの来日キャンセルが相次ぐ中、インド出身の世界的指揮者スーピン・メータ氏が日本でチャリティーコンサートを開催することを発表しました。演目がベートーヴェンの第九だったので、コーラスの一人として私も参加させていただくことになりました。ズーピン氏はとても温かく震災に対する気持ちを語ってくださいました。演奏が終わると五階席まで埋まる満員のホールは総立ちで、オーケストラとコーラスだけでなくお客様まで含めたホール全体の一体感は、震災以降も音楽を続ける大きなきっかけとなりました。以降たくさんの「縁のもと」、小澤征爾さんをはじめ国内外のプロフェッショナルと共演する機会があり、その度に一流の方々のあり方を学ばせていただいています。

文化を育てる

平成三〇年、私は文化庁の연구원としてイタリアへ派遣される機会をいただきました。その際、イタリアの人々は過去の時代に生きた作曲家について友人や親戚のように親しみを込めて語るのでもとても驚きました。それはどうやら学校教育で培われるわけではなく、当たり前に生活する中で自然と身に付く感覚であり、文化なのだということを知りました。日本人にはそのような感覚は希薄と感じます。今後、町に新しいホールができるようですが、ただ芸術作品を鑑賞する場所にとどまらず、住民が気軽に文化活動に参加できる場所になってほしいと思いますし、カルチャーと生活を結びつける窓口となり、町の新しい文化を育てる場所になってほしいと願っています。



縁が紡がれる場所

まちで暮らす人

古民家の宿庄や山口女将

山口加代

文 倉田美咲姫



通りを曲がついていくとだんだんと道が細くなり、集落へ入っていきます。車同士がすれ違うのにもドキドキしてしまい、そんな雑木林と民家の連なりを、好奇心とともに奥へと進みます。大きく見事な屋根を持つ母屋がなんとも味のある、静かな宿を切り盛りしているのは、山口加代さんです。

町との縁

生まれは茨城県結城市で、父の仕事の関係で県内を何度か引越しました。実は、ここに古民家を買って移る前に一度、小学五年から中学三年まで、茨城町に住んでいたことがあります。今考えてみると、やはり町との縁があったのだと思います。その後、水戸に引越して、高校は音楽科に進学して、ピアノを勉強しました。卒業後は県内の音楽教室でピアノの講師をしていました。

その後、二四歳で主人と結婚しました。それを機に、音楽教室をやめ、鳥見町（現水戸市泉町）にあった義父の経営する旅館を手伝うことになりました。それまでとはまったくの畑違いの仕事でしたが、とにかく若かったということもあり、夢中でやっていました。右も左もわからない私に、経理のことから細かな実務のことまで、義父が一から教えてくれました。義父が亡くなるまでの二年間で旅館経営のほとんどのことを教わりました。

それから、経営の主体が義父から主人に変わるのを機に、大洗へ場所を移してホテル経営を始めましたが、二年ほどでまた水戸へ戻り、主人はホテル関係に勤め、私はケーキ屋さんで働きました。当時はとにかくがむしやりに働いていたと思います。

古民家との出会い

そんな中、主人の知り合いから茨城町の古民家の物件を紹介してもらい、かつて養蚕農家であったこの古民家を手に入れました。当初は、「ここで何かしようとは考えていなかったのですが、ひなびたお蕎麦屋さんでもやってみたら」という主人の言葉をきっかけに、お店をスタートさせました。その頃は古民

家を利用した商売は聞いたことがなく、主人には先見の明があったのかも知れません。

いざはじめてみると、この町の中心を離れた静かな立地から、「ゆっくり食事ができるといいな」といったお客様の声があり、だんだんと料理屋に方向転換していきました。料理屋になつてからは「〇年やりました。当時は「この味付けはなんだ。やり直してこい」とはつきりおっしゃられるお客様もいて、時には涙しながら料理を作っていたこともありましたが、今振り返ってみると、とても勉強になったと思います。

重ねられた布団を見かけて

料理屋から宿になったのは、今から二〇年前になります。きっかけは、そば打ちを習いに里美村（現茨城県常陸太田市）の荒時邸（*）へ行つたときでした。屋敷内にお布団がたくさん重ねて置いてあるのを見て、「これだ！」と思いました。もともと旅館をやっていた経験もあつて、この方向にお店をもつていきたという気持ちが強くなりました。この光景を見たあとすぐに、主人に銀行に行つてもらうなど、宿にするための準備を急いで始めました。母屋や客室の蔵の内装は、主人の知り合いにお手伝いいただきました。その方には、もともと料理屋時代からお世話になつていて、伝統的ななまこ壁をもつ蔵に合うよう、あるものを活かすやり方でやっていたいただきました。加えて、私がかつとも洋風な趣が好きなので、細かいことですが、お布団の柄であったり、食器には益子



焼などの土ものを使うなど、お客様の非日常に添えるようにしています。また、客室には「分け入つても分け入つても青い山」で有名な種田山頭火の短歌など、自分のいいと思うものを飾り、おもてなしをしています。

お出ししている食事は、母屋で召し上がってもらおうのですが、田舎料理に徹しています。生の草がらやそばがきなどの季節のものや地もの、この土地だからこそ触れられるものを楽しんでもらうようにしています。蕎麦屋にはじまり、料理屋を経て宿にするまで、大きな意味で示唆を受けたのはお客様や主人からですが、部屋のしつらえや料理、経営まで全部一人でやっています。

紡がれていく人との縁

料理屋をやっていた頃は、口コミで茨城町を中心とした周辺の地域からいらつしやるお客様が多かったのですが、宿にしたら、都心や関東近郊の方が中心になりました。インターネットを通じて知ってくださる方が多く、リピーターの方もいらつしやいます。宿泊の前日には予約が入るかどうかがわかるため、料理屋時代に比べて運営がだいぶ楽になりました。予約があれば前日から部屋の準備や料理の仕込みを行うため、仕事が生活の一部になっています。水戸での旅館時代から考えると、今ではこの仕事が自分に合っていると自覚しています。コロナ禍でお客様が減ったこともありましたが、これまでずっと走り続けてきた分、思いがけずお休みをもらったと思つて三年間を過ぎました。

これまでダメにならずにやつてこれたのは、義妹や娘婿が手伝ってくれるほか、仕事を通じて長く付き合い合っている知り合いやお友達など、そういった方たちのおかげでもあります。この場所に出会えたのも、関わりを持てた方たちも、ご縁としか言いようがありません。

ただ、古い付き合いばかりでなく、新しい、若い方との出会いも嬉しく感じます。年齢や体力のこと考えると、あと何年やれるかしらと考えることはありますが、「こうしたい」と思うことはまだまだたくさんあります。これまで商売の変化を経てやつてきたように、お客様やお手伝いくださる仲間との縁で、それらをやつていければいいと思います。

*：茨城県常陸太田市にある古民家宿



マチノハーブティー 今年も好評販売中です!

昨年度にいは3サポーターが企画したまちのおみやげ「マチノハーブティー」。本年度の販売が始まっています! ボックスセットに加え、要望が多かったフレーバーごとのパッケージもご用意! 町内のお店や、澗沼ハーブの里さんのWEBサイトからも購入できます。茨城町の景色をイメージした3つの味ぜひ味わってみてください。

hinumaherbland.com

From Sun -編集室から-

Sun 第15号をお届けします。

今回の特集で中央公民館に関わる過去の資料を調べました。のど自慢が来ていたことを知って驚いたり、子どもの頃の出来事を思い出して懐かしんだりしました。震災の影響で公民館が使えなくなり、来年には新しい施設のために大ホールもなくなってしまいます。ただ、その思い出は忘れないようにしたいなと思いました。[ひで③] / 過去から受け継いでいる文化を未来に繋ぐ、中央公民館から新たな文化的施設に...と、この想いを繋げられるような場所になってほしいですね! [130] / 写真を見て、子どもの頃に自分が描いた絵が学校に展示されて、とても嬉しかった事を思い出しました。子どもたちが輝ける場所が増えると嬉しいですね。[Sugar3] / 今年は、いばらきまつりや町民の日が復活しましたが、新しい文化的施設も、コロナに負けずみんなで集まってワイワイできる、そんな笑顔あふれる憩いの場となって欲しいですね。[シロクマさん] / 今回、町内で活動するいろいろなクラブを見に行きました。まちで暮らす人たちが心から楽しむところこそ、民俗学や民藝では語れない表現の源泉であり、その土地の個性となる可能性があるのだと感じました。Sunも、このまちの個性となっていければ良いな、と思います。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いは3オフィシャルWEBサイトにUPしています。

いは3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト town.ibaraki.lg.jp/iba3

Sun 第15号 秋冬号 2022年12月20日発行

企画・発行: いは3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL: 029-240-7148 MAIL: iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン | i,D
取材・執筆 | 二川ナオミ 倉田美咲姫 石川聖太
写真 | アラタケンジ 絵 | やまなかももこ
印刷・製本 | 山三印刷株式会社
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

参考文献
茨城町史 通誌編 広報いばらき
Special Thanks [順不同]
墨遊クラブ 茨城町すばるDS連盟
茨城町卓球クラブ 会沢律子



お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

“いは3”ではサポーターを 募集しています!!

“いは3ふるさとサポーターズクラブ”はいばらきまちがつくるあたらしくてゆるやかなつながりの場。設立から6年目を迎え、会員数は950名を突破! ますます盛り上がる“いは3”とみんなでつながろう!!!



いは3 WEBサイト

絵: やまなかももこ

画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」(くもん出版)、
「俵万智3・11短歌集 あれから」(今人舎)など。

momokomo.net

たとえその形が変わってしまったとしても
風景は、目をつぶるとそこにあるものであって欲しいと願います。



低くなつた陽の光を浴び、木々の葉が黄金に輝く季節になりました。町内でもモザイク画の様にいろいろな森を見かけます。この時期になると思い出すのが、かつて駒渡地区にあった美しい並木道のこと。通りから奥へと続く畦道に沿って、青々とした葉を付けた大きなイチョウの木々が等間隔で並び、白く塗られた木箱にPOSTと手書きされた郵便受けが木の側に小さく立っています。秋が深まった頃を狙いふたたび足を運ぶと、鮮やかな黄色に変わったイチョウの下で、数人の子どもたちが走りまわり、とても良い風景だな、と思っていました。上京後、久しぶりに町へ帰ると、その場所がなんと更地に。あの並木道も当然消え失せ、残念だ...と想像していたところ、同じイチョウの木が通りに面する形で再び植えられました。たくさん茂っていた葉は太い枝を残し剪定され、幹の力強さが少ない葉を支えるように見え、また違った良さを感じます。私たちが目にする風景も、季節の移りいほももちろん、時代により刻々と表情を変えています。野山だった場所に道が造られ、建物が立ち、人の営みが入り込むことで、これまでとは違う風景を見せます。人々の暮らしと、そこにある自然。双方を大切にしたいマチのケシキを、これからも見つけていきたいと思っています。

連載

マチの ケシキ



第15回 銀杏と変わる風景

絵 | やまなかももこ 文 | 石川聖太



茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である潤沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です